

「ジェンダー言語文化学」プロジェクトのあゆみ

大 谷 俊 太
野 村 鮎 子
高 岡 尚 子

プロジェクトの発足

「ジェンダー言語文化学」プロジェクトは、2005年、言語文化学科を中心に立ち上げられたものであり、言語や文学に関する分析、研究方法に新たな展開を可能にすると共に、学生自身が自らを取り巻く環境に対して新しい視座を獲得する機会を提供することを目的としている。

言うまでもなく、ジェンダー研究は、男女共同参画社会の実現過程にあって重要な理論的役割を果たしており、特に国立大学法人の女子大学である本学においては、女性のエンパワメントにつなげていくという観点から強く求められる研究・教育分野である。

本プロジェクトは発足からまだ日が浅いが、初年度から文学部長裁量経費プロジェクトとして採択され、現在まで、主として研究・教育体制の整備を行ってきた。

プロジェクト誕生までの歩み

学部プロジェクトとしての正式発足以前にも、すでに、ジェンダーと言語文化という枠組みで様々な取り組みがなされていた。

まず、主に英米の女性学関連書物の幅広い収集に力を注いだ。2003年には研究成果発表として、ヨーロッパ・アメリカ言語文化学講座、言語情報学講座の英米独仏文学分野の研究者による論文8編を収めた『外国文学研究』「文学とジェンダー特集」(1)を、次ぐ2004年には英米仏文学分野の論文5編からなる『外国文学研究』「文学とジェンダー特集」(2)を発行した。また、日本アジア言語文化学講座においては、ジェンダー言語文化学の可能性を探るため、2003年にはジェンダー関連の講義を行い、さらに、2004年には奈良女子大学国語国文学会主催のシンポジウムとして「ジェンダー言語文化学の可能性——日本文学における女性

の匿名性」を開催した。いずれも、日本アジア文化学講座の教員や学生の間でジェンダーと文学という意識を高めるきっかけとなった。

研究の取り組み

研究促進のためには、学内研究者の活動を支えるための文献収集や、学外研究者との研究交流が欠かせない。そのため、文献収集とシンポジウムや講演会開催という二本の柱を設定し、実際に活動を行っている。文献収集については、ジェンダー批評関連書物と、実際に分析されるべき作品で未収蔵の書物を購入し、研究基盤の充実を図っている。

2005年、「ジェンダー言語学プロジェクト 第一回シンポジウム『文学における女性の職業』」を開催した。このシンポジウムには学外から3名の研究者を招聘し、成田美鈴氏には「19世紀ガヴァネス小説におけるガヴァネス像の系譜」、劉小俊氏(同志社女子大学)には「現代中国文学作品にみる保姆^{パオム}の境遇」、村田京子氏(大阪府立大学)には「娼婦の文学的肖像—19世紀フランス文学における娼婦像—」というタイトルで講演をしていただいた。このように、異なる言語・文学分野の知見を集結することにより、単一分野での研究だけでは得られない刺激や理解がもたらされたことはもちろんであるが、同じ「女性と職業」というテーマを設定することで、それぞれの国において、社会的・文化的・歴史的な性のあり方としてのジェンダーがどのように構築されていたかを考察するきっかけとなった。

2006年には「ジェンダー言語文化学プロジェクト 連続講演会」を開催した。第一回は、講師として中川成美氏(立命館大学)を招き、「実践理論としてのジェンダー—フェミニズム・クイア・文学—」のタイトルで、ジェンダーと文学に関する最先端の理論について

お話いただいた。第二回は、風呂本惇子氏（城西国際大学）を招聘し、「ヴードゥーの女神たち—ハイチ系移民女性作家の作品を通して—」についての講演をしていただいた。ジェンダー研究を進めるにあたって、批評理論の推移を知り、実践に活かすための方法を理解することは不可欠なプロセスである。また、ジェンダー理論には、従来の、主に西欧思想による二分法的世界認識の脱構築、および価値においては低位におかれた側への視点の転換と、そのように固定化された構造そのものへの批判的見地が含まれている。その点において、「ハイチ系」「移民」「女性作家」という、幾重にも周縁化された存在への注視は重要な提言であった。

研究成果論文としては、2005年に高岡尚子が「19世紀フランス小説に読む『女性と結婚』—ジョルジュ・サンドの初期作品を中心に—」を、2006年には野村鮎子が「中国士大夫のドメスティック・バイオレンス—出嫁の女の虐待死と父の哀哭—」を、共に『奈良女子大学文学部 研究教育年報』に発表した。

教育に関する取り組み

教育面に関しては、まず授業科目の充実を目指し、2005年度から毎年、プロジェクト関連開講科目を増設している。

2005年に開講した「ジェンダー言語文化学概論」では、ジェンダーと言語・文学について学ぼうとする学生に向けての基礎的な講義を行っている。この授業の受講者数は、初年度には10名程度だったが、翌年には2倍を越え、今後さらなる増加が予想される。また、受講生の学科別比率にはほとんど偏りが見られない現状から、ジェンダーと言語文化を考えるための講義が、言語文化学科に限らず、広範囲の学生にとっての基礎学問、あるいは関心の対象とみなされていることが理解される。2006年に開講した「ジェンダー言語文化学演習」では、概論で示した基礎概念に、さらに複雑なジェンダー批評の理論を加え、実際に文学作品を読み解くことを目指している。また、2007年度には新たに「ジェンダー言語文化学特殊研究Ⅰ」を開講し、言語文化学科の構成員すべてがオムニバス形式で授業を行うシステムを試みている。初年度の今年は、欧米文学を研究する教員が、児童文学・英文学・独文学・仏文学をジェンダーの視点から講じている。

また、日本アジア言語文化学講座が提供する既設の授業科目においても、積極的にジェンダーをテーマとする内容の講義を行っている。2004年には「言語文化表現論特殊研究Ⅰ」に白水紀子氏（横浜国立大学）を招き、中国文学研究にジェンダーの視点を導入する有効性について論じる授業を行った。さらに、同年、「言語文化情報論講読Ⅰ、Ⅱ」松家裕子氏（追手門学院大学）担当の古典文学講読の時間でも『金瓶梅』から当時の女性の精神生活を読み取るという試みを行っている。2006年には、「東アジア文学史論Ⅱ」において「中国古典文学と家族・ジェンダー」をテーマに、近年の学際的な中国女性史に関する研究成果を紹介しつつ、ジェンダーの視点から中国文学、特に古典の読みの更改を試みる研究の一端を講義し、坂元ひろ子氏（一橋大学）が「言語文化表現論特殊研究Ⅱ」で「モダンガール」をキーワードに、中国近現代史におけるジェンダー問題の表れ方と都市文化の形成との関連性について講義をおこなった。これらの授業においても、受講生は日本アジア言語文化講座や言語文化学科のみならず、他学科からの聴講生も複数含まれていたことは特記しておきたい。

研究成果の発信

本プロジェクトでは、2005年以降毎年、プロジェクト報告書を作成し、シンポジウムや講演会の内容を詳細に紹介している。また、本年度は文学部の公開講座として、初めて、プロジェクトによる研究成果を学外に向けて発信した。全体テーマとして「外国文学にみる『父と娘』—ジェンダーの視点から—」を設定し、第一回は、野村鮎子が担当し、「貞婦の父—ジェンダーで読む中国文学」というタイトルで、また、第二回は高岡尚子が「『父の娘』から『母と娘』へ—ジェンダーで読むフランス文学—」をテーマに、それぞれ、ジェンダーで読む文学の方法を論じた。

今回の特集について

今回の特集は、これまでの活動の中から生まれた、齊藤美和による「Margaret Cavendish から読者へ—書き、出版し、献呈する有閑マダム—」、吉田孝夫による「蜘蛛〈女〉への洗礼—J・ゴットヘルフ『黒い蜘蛛』におけるスイス村落共同体」、小山俊輔による「崇高とジェンダー」、高岡尚子による「ジョルジュ・

サンド『アンドレ』を読む—フェミニズム批評・ジェンダー批評から—」という4編の論文で構成されている。齊藤は英文学、吉田は独文学、小山は仏文学というそれぞれの研究分野から、各言語文化に表れるジェンダーの問題を考察している。また、高岡はジェンダーという概念がもたらすことになった文学批評の流れを概観し、実際の分析方法への応用について論じている。今回の特集は、欧米文化・文学を扱う論文に特化しているが、今後、言語学や日本を含むアジア文化・文学に関する報告も順次行っていく予定である。